

「ハレとケ」 通信

第8号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしを提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (8)

「公益財団法人認定記念！」

中津万象園 (庭園編)

「ハレとケ」のある遊びかた・暮らしかた (8)

【神を祭る月／神無月】

中津万象園

「花の歳時記」(8) ツワブキ

かさねの色 (8) 「落栗色」



平成22年9月発行

銅山峰へキノコを採りに行く。左：ハナビラタケ、右：ショウゲンジ。(※本当は、傘が開く前に採るのがおいしい。)

「中津万象園

庭園編

「公益財団法人認定記念！」

【丸亀藩京極家と、中津万象園とは？】

丸亀藩二代目藩主京極高豊侯のもと、一六八八年に築庭を始められた別荘（大名庭園）、
「中津万象園」。

丸亀藩京極家の初代藩主は、来年の大河ドラマの主人公、「江」姫のお姉さんである「初」（[㊦]）の孫にあたる。

また、築庭を始めた二代目藩主は絵画に堪能で仁清焼特有の華やかな絵付の完成に貢献するなど非常に絵心のある人物だったらしい。

（[㊦]）浅井長政とお市の娘である茶々・初・江の三姉妹のうち、初は真ん中。京極家は近江源氏の家柄を誇り、婆娑羅大名として知られる佐々木道誓の時代に栄えた。）

そのような歴史あるこの庭園も、京極家の手を離れた後は、民間の所有者を転々とする。

明治・大正・昭和を通じ、庭園として、また海水浴場として親しまれてきたが、

南海大地震による地盤沈下、度重なる台風高潮で石組み等が崩れ、荒れていく。

その現状を惜しみ、この庭園の修復を決意、着手したのは昭和四十五年のこと。

元大阪芸術大学学長・中根金作氏の指導を得て、昭和五十七年に庭園の復元、一般公開へこぎつけた。

しかし、維持管理には莫大な費用が掛かることから、「この庭園が『独り立ち』しなければ、近い将来には再び荒廃してしまうかもしれない。次世代に継承すべき遺産としての文化財を認識し、永く保全・活用するためには、地域のカルチャーコミュニケーションプラットフォームとして機能せねばならない」という判断から、園内に丸亀美術館を併設。

その後、平成十年には念願の財団を設立。地域の企業また個人の皆さまより温かいご支援ご理解をいただきつつ、平成二十二年九月一日付けにて公益財団法人へ移行、現在に至っている。

今回は、その公益財団法人移行を記念して、中津万象園修復の物語（庭園編）をご紹介します。



「現在の中津万象園」



「さぬき浜街道開通前の上から見た写真」

時代の流れの中、変わらず愛されてきた中津万象園の姿

「庭は、生き物。」

それはつまり、

「木々は生長し、葉を落とし、草は生い茂る」常に手入れを必要とする」という意味でもあります。

「使い手があってこそその『庭』」

だから、**時代と共に、楽しみ方・係わり方が変遷して当然であり、その全ての変化が歴史となる**」という意味でもあります。

そのなかで、わたしたちは、「大名庭園」として残り、一般に公開することを選びました。



昭和四〇年頃埋め立て前の中津海岸で。

[在りし日の中津万象園]

京極家の手を離れた後、
転々と所有者を変えた中津万象園。
今は「太鼓橋」の形となっている
「邀月橋」ですが、この頃は平らな橋で
あったことが分かります。
明治・大正・昭和と所有者の変遷により
その用途は変化してきましたが、
変わらず地域の人から親しまれてきました。

大名庭園としての「中津万象園」とすることを選んで…

日本庭園を修復するって、 どういう作業なんだろう？

石組みを池から引き上げる、組みなおす、茶室の萱を葺き直し壁を塗る、植栽を補充する、橋を架ける、あずまやを復元する、園路を整備する…。それらはすべて「建設業」の仕事です。

ですが、肝心の「どういうふうに復元すればいいのかな？」が、分からない…。

その難題は、名高い造園家・中根金作氏（大阪芸術大学元学長、栗林公園、兼六園などの修復の他、足立美術館の造園でも有名）の指導を受ける機会に恵まれたことにより、解決されました。

ただ、これらの修復作業は莫大な出費を伴います。そんな中で、合間を縫って長期に渡り修復を手がけることのできる、建設業を生業とする私たちにこの中津万象園を修復する縁がもたらされたことは、ある意味、運命だった…と思っています。

（写真は修復途中の園内）





【茶室母屋・観潮楼修復】

煎茶席とも抹茶席とも言われる、
江戸時代の茶室二亭。

修復にかかわった社員にとって、
『文化財』の建物を
預かっている…という意識は
あまりなかったという。

当時の社員いわく、
「もともと人が住んでいたし、
“建物が傷んでいるから、
直す”という
自然な気持ちで
修復に取り組んでいた」。

角のピンと立った、
修復間もない茅葺き屋根の
ラインが清潔で美しい。

さの二つ…、といったところでしょうか。
そんなふうに色々と「想像の余地がある」のが、大名庭園の面白
のんびりくつろいだのでは？と思わせる一節も。

また、ここで詠まれた漢詩の中には、お殿さまがひとり、ここで
た家系。仁清焼の絵付けも、華やかな京の文化に触発されて誕生
した…とも言われています。もしかするとこの茶室も、当時煎茶
に代表された京の雅な世界に憧れて造られた茶席だったのかもしれ
ません。

そもそも京極家は、「武人」というよりは「文人」の家風で知られ
た家系。仁清焼の絵付けも、華やかな京の文化に触発されて誕生
した…とも言われています。もしかするとこの茶室も、当時煎茶
に代表された京の雅な世界に憧れて造られた茶席だったのかもしれ
ません。

因みに、こういった開放的な茶室は「抹茶」でなく「煎茶」の席で
あることも多いそう。その「煎茶」は江戸時代、売茶翁高遊外（二六
七五～一七六三）により盛んとなり、「武士の教養、たしなみ」として
の茶の湯に対し、「文人の教養、風流」として京洛の文人たちに喝采
して迎えられたといわれています。

床柱は孟宗竹、落し掛けは赤松の皮付き。床框は力子、床
板はトチの一枚物、天井は鳥の子紙、手摺りはクリ…とそれぞれ
趣向を凝らしているものの、全体としてみればスッキリとしていま
す。あまりにも開放的に作られたこの空間を見て、「ここ、どうや
つて使ってたの？」「どこでお点前するん？」と尋ねられることも。

「観潮楼」の名前の通り、海岸の方向へ縁を出し、池に浮かぶよう
に建てられた茶室と、母屋（広間）。

「中洲のお茶所」としての心臓部を修復する

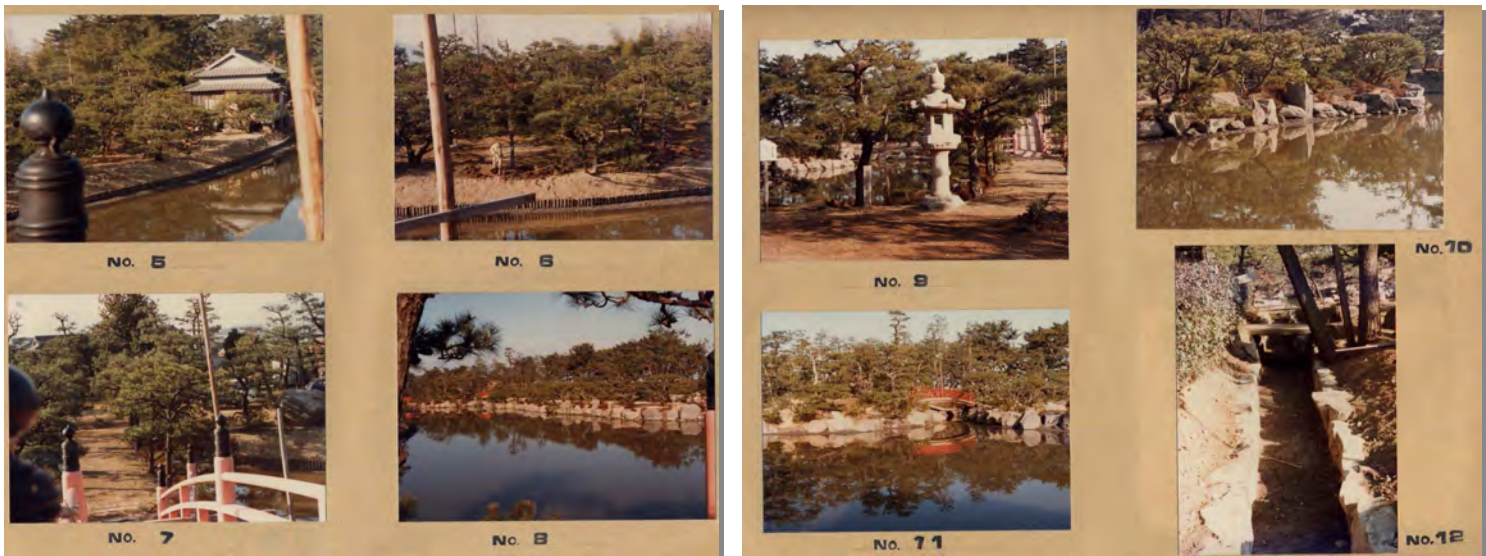
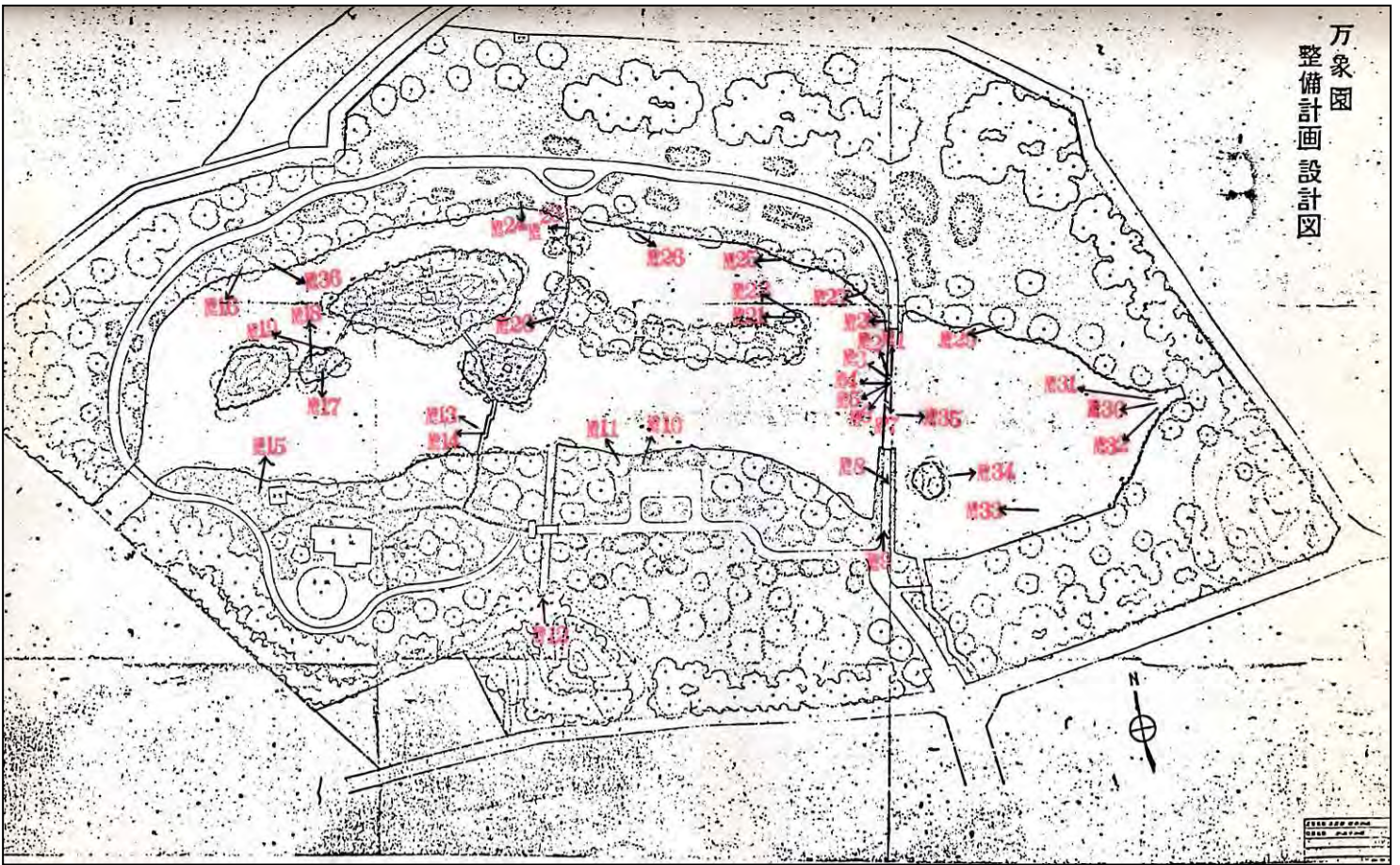
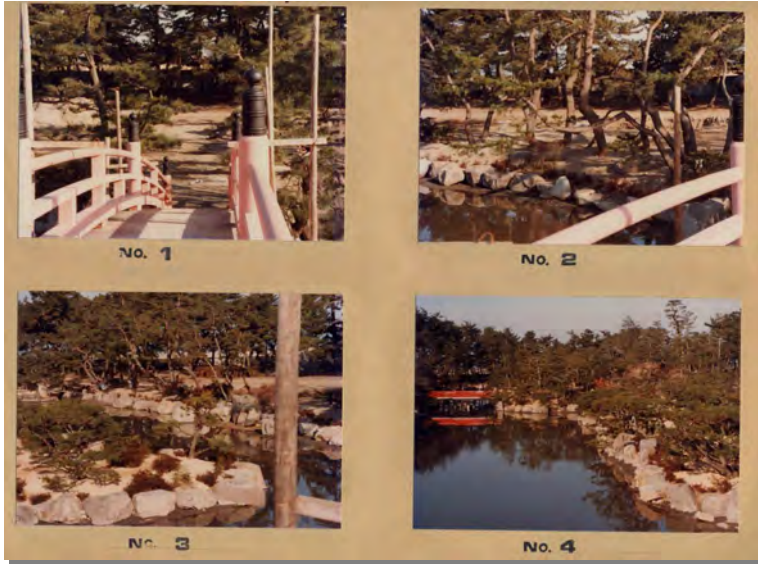
庭園を修復する

中根金作先生のご指導を受けることができたおかげで、園内整備計画設計図ができ、その設計図に基づいて実現に向けた工事を進めていきました。

〈中根金作先生 略歴〉

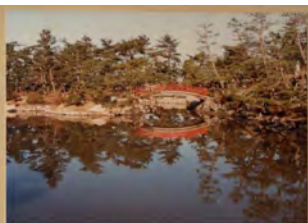
大正六年 静岡県生まれ。
中根庭園研究所開設、元大阪芸術大学学長。
天童寺、慈照寺、清水寺、南禅寺、龍安寺、大徳寺、相国寺、平安神宮、平等院、西芳寺、栗林公園、兼六園など文化財修復の設計監理は枚挙にいとまがない。また、足立美術館の設計監理を行ったことでも知られている。

中根金作先生のご指導による、
【中津万象園 整備設計図】。
図面中のナンバーと、写真に振られたナンバーとが
照応しています。





No. 13



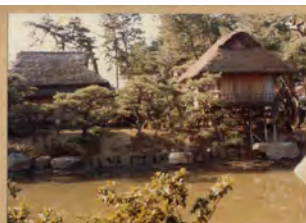
No. 14



No. 15



No. 16



No. 17



No. 18



No. 19



No. 20



No. 21



No. 22



No. 23



No. 24



No. 25



No. 26



No. 27



No. 28



No. 29



No. 30



No. 31



No. 32



No. 33



No. 34



No. 35



No. 36

**ここに注目！**

左右の写真の橋は、同じ遯月橋。「でも、なんだか違う…」と思った人は、なかなか鋭い！実は、当初の橋(左)には、『橋脚』がありません。構造的にはこれでOKだったものの、「脚が無いと、おかしい」という指摘で、後から脚を付け足したそうです。

←当初完成した遯月橋。左手に園内で暮らしていた人の民家が見える。

↑現在の遯月橋。

造園課最年少、堀口剛宏(左)。

「手入れが難しい木ってある？」の質問には、「記念写真撮影のコーナーの後ろの松の木が苦手。」と即答。曰くは「体調が悪いとか弱いとかでなく、性格の悪い木、ってある。」らしい。
「なぜ庭師に？」と聞くと、「内勤の仕事をしていたので、転職の際には外で働く仕事と決めていた」という飄々とした答えを言うが、早朝 4 時からの予防、高所での剪定など厳しい業務をニコニコとこなしている。



造園課最年長、安藤豊(右)。

定年後の再就職で万象園へ。もっとも根気のいる作業である「掃除」を主に行っている。「掃除」と一言でいうものの、これは重要な仕事。落ち葉、雑草、ゴミなどの有無など、いわゆる『見た目』が、お客様の印象をリアルに左右するからだ。手入れが行き届いている・・・という印象を支える掃除の段取りを呑み込んだ安藤さんがいるおかげで、他のメンバーは園内の剪定作業をスムーズに行える。それだけに、「私やって、いつまでもここでおられんからなあ。年取ってくるし・・・。」と後継者を心配している。

造園課、渡邊武司。

他社でのサラリーマン経験を経た後、庭師を志して専門学校へ入学、中津万象園へ。無口な第一印象だが、いったん話し始めると、しっかりと自分の思うこと、意見を述べる。
剪定がし易くて楽なのは、雁の島。あまり芽が伸びないため、気を使わずに形になるからだという。剪定の仕方次第で木の形が決まってしまうことをよく分かっているからこそ、慎重な感想だ。プライベートでは剣道の腕前を活かし、全国大会に出たり、地域の子供たちを教えたり・・・と活躍している。



ここに注目！

↓庭師小屋の前で孵し飼育したカモ。そろそろ園内デビュー！？



「お客様に喜んでほしい！」園内の掃除・手入れに追われるハードな毎日も、すべてその気持ちがあるからこそのこと。そんな思いのひとつとして、今年はカモを育てました。園内を泳ぐかわいい姿が見られるのも、そろそろかな？

縁の下の力持ち！？ 中津万象園の〈命〉〓木々を預かる、「庭師」の仕事とは？

そして、現在に至る維持保全活動のなかで...



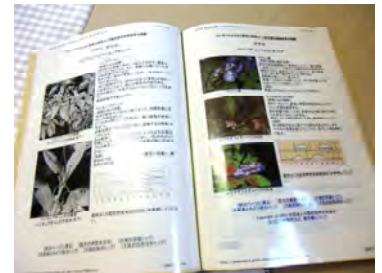
中津万象園の維持管理を預かる造園課の責任者・田口彰良(課長)。

人手の足りない中、優先順位、段取りを常に考えながら日々の業務を行っている。

ただ、園内業務を一番よく分かっているだけに、感じる「もどかしさ」も人一倍。改善計画、要望等を考えては社長に提案・説明にいくので、「田口課長の“挑戦状”がまた出て来たナ」と冗談交じりに社長から言われることも。

現在は、松・雑木に分けた年間・中期・長期の手入れ計画を作成中。その計画書を公開し、また園内に看板等で表示することで、当園にかかわるすべてのひと(お客様を含め)と庭園の将来像を共有し、必要な手入れを優先して行える体制を作っていきたいと考えている。

→インターネット、書籍等で調べ作成した、田口課長の「園内手入れえんま帳」。木の種類ごとに病気、予防法、手入れのポイントなどがまとめられている。



【園内に彩りを添えるサツキ、ツツジ】

万象園に咲く花と言えばサツキ、ツツジだが、実は数年前までは、ずいぶん花の数が減っていた。おそらく虫のせいだろう・・・とは思ものの、なかなかその予防法が見つからず・・・。県の農業試験場、園芸センター、有識者、盆栽に詳しい近隣の人・・・とさまざま人に教を請い、予防法・回数を変更。手間はかなり増えたけれど、ついにびっしりと花を咲かせるまでに回復した。
(犯人は、花芽の中に巣くうベニモンアオリンガ)



中津万象園 造園課

↓高所に慣れた庭師をも怯えさせる、松の高木。
樹齢何百年…の迫力は、ゴツゴツとした幹にも表れます。



「庭の手入れて言っても、いろいろある
と思うけれど、たとえば木一本一本で好
き嫌いつてあったりします？」

(田口) 私は特にないけど。ただ、人の
目につくところは、やっぱり気は使う。
同業者同士のプライドもあるし、ここ
の責任者として誇りもある。それに手入
れは、木の寿命が続く限り代々引き継が
れていくもの。後世の人から、「あいつの
頃」には言われたくない！」(笑)

(堀口) 僕は、写真撮影の後ろの木、調
子が悪い…というか、性格が悪い?!
(田口) そういう木は、誰が摘んでもお
かしくなる。(笑)

(堀口) あと、陶器館の前とかの高い木。
正直に怖い。登れないですよ。
(渡邊) 僕も怖い。「いつまでしよるんや

ー」と課長にからかわれるけど、六
七尺以上の木、つまり脚立じゃ無理な木
は、…疲れるーあとは、剪定が遅れて大
きくなりすぎた木とか、成長の早い木も
どういふふうに着みこめば良いのか、ま
だ判断に迷うから苦手。その点、雁の島
の木は成長が遅いから悩まない。

(安藤) 私も、美術館の脇とかの目につ
く木はまだ苦手。

(堀口) 日頃松が多いから、たまに雑木の
手入れのときは、楽しい。

「調子の悪い木、性格の悪い(?)木って、
どんなもののこと？」

(田口) 例えば一年間剪定が遅れたとき、
まったくどうしようもなくなる木とか。
成長が早過ぎる木、芽の強さにムラがあ
る木、逆に芽が出ない木。

「庭木の摘み
こみ以外にも、
大名庭園な
らではの苦労
ってあります
よね？」
(田口) 松くい
虫の予防は大
変かな。県な
どが山林に一

斉散布する場合は、ある程度きつい濃度
の薬でも良いけれど、うちの場合は、あま
り濃くすると雑木、特にモミジやサクラ
が傷んでしまう。それに、空から行っ
てじゃないから、風向きや散布者のクセ
にも左右されやすい。一本でも枯れたら
お客様は「荒れている」と感じてしま
う。一本も枯らさないというのは、実はす
く難しい。そこで考えたのが、『①濃度を
薄くする、②散布回数を倍に増やす、③
担当者を代わりばんこにする。』この方
法で今は、やっている。手間は倍かかるけ
ど…。

あとは、池のヘドロ・井戸を掘ったお
かげで鰻が死ななくなつた(水温の上昇
が抑えられる)し、水やりもできるよう
になつたけれど、ヘドロ対策は難しい!
(安藤) 仁尾の畑にもお世話になつとる。

(田口) あ、そうそう。松葉や雑木の葉
がいったいどのくらいゴミとして出るか
考えてみればわかんと思うけど、ほんま
にすごい量。

それを、仁尾の果樹園の人たちが下草
が生えるのを防止するのに使うから…と
引き取ってくれるようになった。今では
地域全体の人が協力して毎月3回程度、
一回当たり1.5トン〜2トンを引き受け
てくれる。これは助かる!



↑こんな風にモコモコになってしまった松の木は、「早く摘み込んで!」と呼びかけているかのようです。一見、「緑がきれいで良いのに…」と思ってしまうそうですが、その油断が命取りとなることも。日本庭園の手入れの難しさを感じさせます。

庭園のこれから。

今現在、庭園の長期整備計画案について作成中です。その目的は、庭園の将来像、手入れの優先順位をお客様や関係者の皆様と共有することで、「必要な手入れ」をできる体制をつくること。

つまり、大きくなりすぎた木を小さく整えていくには、「強剪定」という作業が必要となりますし、ほかに優先すべき木があれば、園路沿いの目立つ木でも後回しになることもあるかもしれない。結果、一見手入れ不足のような様相も呈します。

でも、それは、今後のために必要な過程。

そんな状況のときにも、皆様にご心配をかけないように「これは将来のこういう姿を目指すために必要なのです」と説明し、看板等で周知できる体制をつくっていきたいと考えています。

近いうちに完成予定ですので、その際にはぜひお目通し、ご支援ご協力をお願いいたします。

(真鍋)

「これから、何が課題と感しますか？」
(田口)今現在は、「手入れを必要としている木」と、「園内の見栄えのために優先すべき箇所」とが「ちゃんとちゃんになっている」と、ただ、園内の見栄えを優先しているといつか、生き物である木は取り返しがつかない姿になってしまうかもしれない。一年手入れを飛ばすと、その分木の芽は大きくなり、太くなる。芯が太くなつて

「一万五千坪の庭を四人つて、大変やと思っけど...」
(田口)それはもう！庭は金と手間をかければかけるほどうまくいく、つて俗に言うけど、うちの場合どちらにもかからない。(笑)でも、たとえばフロアーとか、除草剤とかを駆使して、できる限り要領よくこなせるよう改善を重ねている。機械の中で今一番ほしいのは、小型のコンボ。人力の不足部分を多少でも補えるし、重機があることのメリットは大きい。



「脚立を見つけたら、樹の上を探してみてくださいね。庭師が、木の剪定を行っているかも!？」

しまった芽は摘んでも形にならないし、葉を透かすのが遅れた枝は、混み合った葉が枯れてしまう。
とにかく、十分な木の手入れをできる体制を作りたい。公益法人になつたことを機に、そういった計画ももつと立てていきたいと思う。
(会話から抜粋)

〈次号は「建物編」です。お楽しみに!〉



ここに注目!

二〇〇四年の台風襲来時のこと。
大傘松の向かい側、竹林の傍にあった松の老木が裂けて倒れ、大傘松を直撃。写真のように傘松に突き刺さり、美しい山型だった松に、大きな穴が開きました。当然ながら、「なぜ、この松が倒れるかもしれないことを予期できなかったのだろう」と責任者である田口は落ち込み、一時は周囲もすいぶん心配をしました。

ですが、今は松は元の姿に近いまでに回復。復活した傘松を、ぜひ見に来てくださーいね。

↓大傘松の根。ご覧の通り一本の松です。



この季節を暮らす。(8)

【神を祭る月／神無月】

旧暦十月のことを神無月といいますが、なぜそう呼ばれるかご存知ですか？

神無月の語源には、諸説ありますが、十月は神を祭る月であることから「神の月」とする説が有力とされています。この場合の「無」は「水無月」と同じく「の」を意味します。

また、中世の俗説には、十月に全国の神々が出雲大社に集まることで、諸国に神がいなくなることから「神無月」となったとする説もあります。反対に、出雲国（現在の島根県）では「神在月（かみありづき）」と呼ばれ、出雲大社をはじめとする幾つかの神社で神事が行われます。その他にも、雷の鳴らない月で「雷無月（かんなづき）」が転じたとする説や、新穀で酒を醸す月ので「醸成月（かもなしづき）」が転じたとする説、新嘗（にいなめ）祭を迎える準備の月であることから「神嘗月（かんなめつき）」が転じたという説もあります。

しかし、一般によく知られるのは、出雲大社に全国の神が集まって、出雲以外には神がいなくなってしまう月であるから、という説ではないでしょうか。

各地の神々が不在となる神無月の由来は、春に山から降りてこられた神が田の神となり、稲の収穫を見届けてまた山に帰るという「神送り」と出雲信仰が習合し、山に帰るはずの神々が出雲に向かうという伝承になったようです。

◆神在祭（かみありさい）／出雲大社◆

諸国の神々が集まった出雲大社では、男女の縁を結ぶ相談や酒造り、農作の収穫や漁労など、一年のことを話し合う、神議（かむはかり）という会議が行われ、神々の会議処である上宮（かみのみや）では祭りがとり行われます。また、神々の宿泊所となる境内の十九社でも、連日祭りが行われます。

出雲大社で神様の会議が行われるようになったのは、大国主神が日本の国土を開発した際、自分の息子や娘を各地に配置し、その土地を管理させたことに由来します。各地に配置された子どもたちは、年に一度十月に、父親である大国主神のいる出雲の国に戻り、その年の出来事を報告し、来年の予定を話し合ったとされています。云わば、里帰りというわけ

ですね。

この会議は、旧暦の十月十一日から十七日までの間、出雲大社で開かれ、その後佐太神社に移動し、二十六日まで続きます。

◆恵比寿講 えびすこう／留守神◆

諸国の神々が出雲地方にいるあいだ、その地域や家を鎮護するものがいなくなってしまうと大丈夫なの？とお思いの方ご心配には及びません。「留守神」と呼ばれる神様が、地域や家の留守を護ってくれます。恵比寿神、金毘羅神、竈（かまど）神、道祖神などが留守神とされていますが、中でも、体が不自由なため出雲まで行くのが困難、という言い伝えがある恵比寿神の名前は有名です。

そんな、留守を護ってくれる留守神である恵比寿様を祭るのが『恵比寿講』です。旧暦十月二十日に、一年の無事を感謝し、五国豊穰、大漁、あるいは商売繁盛を願って行われます。この『恵比寿講』ですが、仲間の神様が出雲へ行っている間、留守番をしている恵比寿様をなぐさめるという意味もあるようです。

地域によって、日取りや内容に違いがあり、花火を上げて盛大に行うところも

ありますが、家庭内で行う場合は、恵比寿様に新米のごはんやサンマ、煮物など、秋のおいしいものをお供えしてお祭りします。

新暦十一月二十五日が旧暦十月二十日にあたります。恵比寿様に「馳走をお供えした後、家族で秋の味覚を味わいながら、一年の出来事を報告し合ってみてはいかがでしょう。」

【秋の七草】

十月に入ると萩の花が咲き、秋の七草がほほそろいます。秋の七草は、食用の春の七草と異なり、ながめて楽しみます。お花屋さんでも買えますので、秋の訪れを実感してみてください。

- ・はぎ
- ・おみなえし
- ・おばな
- ・ききょう
- ・なでしこ
- ・くず
- ・ふじばかま

（文・十岐倫子）



「花の歳時記（8）ツワブキ」

深まり行く秋、八景池を左に回遊路を西へ進みますと、やがて池の中で最も小さい島「雨の島」が手の届くような位置に迫ってきます。その島に架かる切石橋から西方を望んでください。黒松の巨木に鬱蒼と覆われた園内最大の島「晴嵐の島」と共に、その北側の岸辺に咲く黄色い花の群落を目にすることが出来ます。この草花がツワブキであります。

日当たりの良いところで咲く桜やツツジ・バラ・ボタン・チュウリップ等の豪華さはありませんが、多くの花が姿を消したこの時期、寒風にじっと耐えて黄色い頭状花を力いっぱい咲かせています。このひたむきな生き方に大きな感動すら覚えます。

ツワブキは本州の日本海側では石川県、太平洋側では福島県以南と、四国・九州・沖縄県など暖地の海岸付近に分布

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路 坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分



雁の島より美松を前景として邀月橋方面を望む

【長岡 公 氏】

昭和 2 年 10 月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校
農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・
笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、
高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月 定年退職 香川西高等学校教頭
現 在 公益財団法人中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）。

しており、これらの地方では、潮風が強く当たる海岸の崖などにしがみつくようにして自生している状態を良く見かけます。温暖な気候・潮風・砂地この3点が石路の生育条件のキーワードであろうかと思えます。とすれば、この晴嵐の島北側の岸辺は、ツワブキにとつては最適の生活環境であるといえましょう。

ツワブキの和名は、その葉がフキに似てつやつやと光沢があることから当初は『ツヤフキ』と呼ばれていたのが次第に訛って『ツワブキ』になったと言われています。またツワブキは昔から食用や薬用として人間生活に利用されてきました。

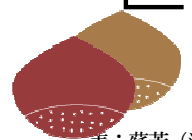
土踏ぬれて 今日 雨の日 よき館
（京極藩丸亀陣屋跡地の石碑にある俳句
作者不詳）

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（8）

「落栗色」

日本人の季節を感じる心、
美しいと感じる色彩感覚。



表：蘇芳（濃）／裏：香
着用時期は秋。
実り熟して地面に落ちた
穂の割れ目から覗く栗の実の色。
色味はほぼ同じ。

そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

【編集後記】

「耳学問」が大好きです。」

…という、なんだかとても無精でいい加減に聞こえてしまうかもしれませんが、どちらを向いても、知らないこと、知りたいことばかり！”な私の場合、「勉強したくとも何から取り付けばいいのか、その糸口さえも分からない…」ということがしばしばあります。でも、そんなとき、その分野をよく知る人から、まずお話を聞くことができれば、一歩を踏み出すことができます。

また、様々な仕事、社会で活躍ががんばっていらつしやるかたのお話をうかがうことで、これまで知らなかった新しい世界が突然見えてくることもあります。その楽しさ、嬉しさは言い尽くせません。

そういった、いわば、『水先案内人』とも言うべき皆さまのおかげで知ることのできた多くのことと、巡り会うことのできた多くのチャンス、縁に、心から感謝しています。『質問魔』の私ですが、どうぞこれからも末長くお付き合い、ご指導下さいませ！

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp（真鍋有紀子）

建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号／一級建築士事務所：香川県知事登録第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭